青年海外協力隊 検索

http://www.jica.go.jp/shikoku/

独立行政法人 国際協力機構 JICA四国支部

〒760-0028 香川県高松市鍛冶屋町3番地 香川三友ビル1階 TEL:087-821-8824

日本も元気にする

青年海外協力隊

国際貢献で培われた力をいざ、四国で

世界を元気にした人は、日本も元気にできる！

JICA ジャイカ

その経験を四国で活かし、未来につなげる

SHIKOKU

さまざまな職種で2年間、
開発途上国で協力活動を展開する
JICAのボランティア「青年海外協力隊」。
OB・OGの中には赴任先で培った経験を活かし、
地域の発展に貢献している人たちが大勢います。
JICA四国では四国4県で地域を元気にしている8組を訪ね、
「日本も元気にする青年海外協力隊」がつなぐ
希望に満ちた未来を確かめました。

世界を元気にした人は、日本も元気にできる！

C O N T E N T S

P03 愛媛県宇和島市

子どもたちの海外交流を地域ボランティアで
みかん農家
清家善一さん
赴任地：タンザニア
清家恭子さん
赴任地：ケニア
清家央樹さん
赴任地：マラウイ

P05 愛媛県砥部町

エジプトの息吹を注いだ砥部焼の豊かな未来
龍泉窯 陶芸家
池田麻人さん
赴任地：エジプト
池田昌史さん
赴任地：エジプト

P07 香川県小豆島町

子どもたちの元気な声があふれる島に
小豆島町役場 職員
藤井愛子さん
赴任地：ニカラグア

P09 香川県高松市

海外からのゲストに価値あるローカル情報を
ゲストハウス若葉屋 宿主
若宮武さん
赴任地：セネガル

P11 徳島県神山町

地域の人々とふれあい里山に活気を生み出す
神山町地域おこし協力隊
滝下智佳さん
赴任地：ボリビア
川野歩美さん
赴任地：バングラデシュ

P13 徳島県吉野川市

医療で町を支援し国際協力の拠点となる
特定非営利活動法人 TICO
吉田修さん
赴任地：マラウイ
福士庸二さん
赴任地：マラウイ
新野和枝さん
赴任地：ニジェール

P15 高知県黒潮町

Tシャツアートで結ぶ日本と世界の子どもたち
特定非営利活動法人 NPO砂浜美術館事務局スタッフ
西村優美さん
赴任地：モンゴル

P17 高知県四万十町

赴任で得た夢を実現 高知で国際理解教育を
四万十町立窪川小学校校長
坂山英治さん
赴任地：パプアニューギニア

愛媛県宇和島市

「海外の文化に触れるチャンスを子ども達に」協力隊の経験も育んだ、みかん山から届くビタミン

みかん農家

清家央樹（せいけ おうき）さん（左）

赴任地
マラウイ

赴任地での職種（活動分野）
村落開発普及員

主な活動内容
地域おこしのために伝統舞踊の開催をサポート

清家善一（せいけ ぜんいち）さん（中）

赴任地
タンザニア

赴任地での職種（活動分野）
野菜栽培

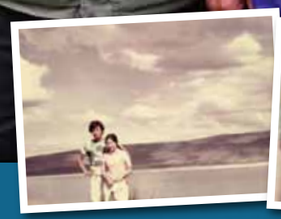
主な活動内容
政府の農園でオレンジの苗木を栽培

清家恭子（せいけ やすこ）さん（右）

赴任地
ケニア

赴任地での職種（活動分野）
婦人子供服

主な活動内容
子どもたちに洋裁の技術を指導



タンザニアで出会った頃の善一さんと恭子さん

恭子さんが洋裁を指導する様子

通用しなかった先進国の農業

斜面に広がる青々とした木々が、収穫時期に合わせて橙色のアクセントを放ち、季節の移り変わりを優しく教えてくれる通称「みかん山」。みかん、せとか、デコポン…。宇和海を挟み、遠く九州も望むことができる温暖な場所では、ほぼ一年に渡って色々な種類の柑橘類が豊かに実ります。「赤ちゃんが口にしても安心なものを」と肥料や農薬に配慮して栽培するのは、100年以上も前から代々みかん山と寄り添う清家さん一家。協力隊での赴任経験を持つ親子3人です。

善一さんがタンザニアに赴任したのは、大阪万博が行われた1970年。協力隊の派遣が始まってまだ5年目の、各途上国では植民地支配の影響が残る大変な時期でした。善一さんは政府の農場で、栄養事情の改善を図るための苗木生産に取り組みます。「赴任前にアメリカで2年間、農業を学んだ経験もあり、現地での活躍を確信していましたが、蓋を開けると困難の連続。環境はまるで違い、通用する技術はわずかでした」。

善一さんは先進国とはかけ離れた農業を目の当たりにし、果物を育てる厳しさを再認識することに。それでも必死に活動を続け、帰国まであとわずかと迫った頃、恭子さんと出会います。

物を大切にする心を子どもたちの喜びから

埼玉県出身の恭子さんは幼い頃から海外に憧れ、協力隊での活動を目標に青春時代を駆け抜けました。善一さんと同じ年にケニアに赴任。それまで培った縫製技術を活かし、現地では職業訓練校で子どもたちに洋裁を教えます。当初は教科書すらなく、厳しい環境の中でのスタートでしたが、下着さえ買うことができない貧しい子どもたちは、期待に胸を膨らませて授業に参加。苦労の末に衣服を完成させると、喜びを爆発させたそうです。

「みんなで抱き合ったり、踊ったり。自分も嬉しくなりました。そして、物を大切にすることを学んだのもこの時です」。

恭子さんは休暇を利用してタンザニアを訪れた際、善一さんと知り合いに。帰国後、埼玉と愛媛を結ぶ遠距離交際が始まり、1年を待たず結婚。ケニアに似た、みかん山の大らかな環境も嫁ぐ決め手になったようです。

そんな国際経験豊かな二人のもとで育った央樹さんも、当然のごとく2009年にマラウイへ。村落開発普及員として地元伝統舞踊の開催をサポートし、町おこしのきっかけを作りました。

「両親から何度も話を聞いていたお陰で赴任生活に苦労はなかったです。それに、自分が育った場所も現地と似たような環境の村。考え方や意識は住民とほぼ同じでした」。

央樹さんは「ありがとう」「ごめんなさい」「トイレはどこですか?」の3つの言葉を持っていれば、誰でも海外で生きていけると話します。

みかんを選果する清家さん一家

赴任地マラウイでの央樹さん

地元に国際交流協会を有志と設立

3人のボランティアに対する意識は今も高く、地元の子どもたちが海外の文化に触れられる機会を幅広く提供。中高生の海外派遣や英会話教室の開校など、善一さんたちが設立した「吉田町国際交流協会」を通して精力的に行われています。「今では一般的なハロウィンパーティも2000年頃から毎年、開催しています。インドネシアや中国、フィリピン、ベトナムの人たちと一緒に『世界の料理教室』というユニークなイベントも開いています」とは恭子さん。海外から訪れている農業研修生の待遇改善にも余念がありません。

「いつか海外でみかんを作りたい」。

思わず胸の内を漏らした父に、「自分の年を分かっているの!?」と慌てて答える2人。ただ、3人の表情はみかん山と同様にどこまでも朗らかでした。

枠にとらわれることなく柔軟に対応を。

「『活動をしっかり頑張るぞ!』と意気込むよりも、『新しい友達を作る』ぐらいの気軽な気持ちで参加した方が現地ではうまくいきます。仕事や環境がきちんと整っていないケースもありますので、職種に左右されることなく、柔軟に対応していくことが大切です。それが結果的に自身の成長に繋がり、帰国後の活躍に結びつくことも! 」（清家央樹さん）

愛媛県砥部町

赴任国での経験が兄弟二人の制作の礎に砥部焼の新たな魅力を未来へ、世界へ

龍泉窯 陶芸家

池田麻人（いけだ あさと）さん（左）

池田昌史（いけだ まさし）さん（右）

赴任地

エジプト

赴任地での職種（活動分野）

陶磁器

主な活動内容

子どもたちを中心に陶芸を指導。作品展や販売会も開催

不自由な環境での指導を通して原点に回帰

鉢や茶碗など生活陶器として全国的に人気の、国の伝統工芸品にも指定されている砥部焼。愛媛県伊予郡砥部町を中心に作られ、少しふっくらとした形の白磁と、表面に描かれる藍色の文様が特徴です。240年以上も伝統を守り続ける地域には、100軒近い窯元が点在。その中の一つで原始的な穴窯を構える「龍泉窯」では、二人の兄弟が協力隊の経験を色濃く映す砥部焼を手掛けています。

兄の池田麻人さんが協力隊に参加したのは26歳の時。偶然、知り合った隊員OBから耳にする募集情報がきっかけでした。「砥部で養った技術を活かし、逆に派遣国の文化に触れることで陶芸の視野を広げたい」。麻人さんの気持ちは一気に膨らみ、出会いからわずか数ヶ月でエジプト・アレキサンドリアへの派遣が決まります。

現地では障がいのある子どもたちに陶芸を指導。ただ、すべてが整う日本とは正反対の、材料や道具に不自由が伴う環境でした。当初はろくろや窯もない状況で、授業は工夫を凝らしながらほぼ手作業で対応。それでも子どもたちが目にする対象への興味は凄まじく、遊びを通して少しずつ技術を身に付けていったといいます。麻人さんも子どもたちの自由奔放な取り組みに当初は戸惑いつつも、その躍動感に触発。陶芸の原点に戻り、本来の魅力や作り方を考える契機へと繋がります。電気やガスではなく、天然の薪を使って器を焼成する穴窯への興味も自然な流れでした。

「子どもたちが作品を作り上げて素直に喜ぶ姿も新鮮だった」。

無邪気な笑顔も大きな弾みになったようです。

兄が辿った道を弟も経験し、同じ窯の元で

弟の池田昌史さんがエジプトのカイロに赴任したのは、麻人さんが帰国して4年後の2008年でした。すでに陶芸職人として、赴任前は別の窯元で汗を流していた昌史さん。原料の一部を海外からの輸入に頼っている砥部焼について、もっと深く知るためには世界の陶芸を学ぶ必要があると感じていました。公私ともに影響を受けている兄から、折に触れ聞かされた派遣時代のエピソードも刺激になり、協力隊への参加を決断。そして麻人さんと同様、子どもたちに陶芸を指導する立場に。環境や感動も同じように経験し、陶芸への意識がやはり原始的な方向へと傾きます。

陶芸を指導する兄の池田麻人さん（写真上）と弟の池田昌史さん（写真下）

穴窯の様子を窺う2人

「大きな財産をエジプトで手に入れた」。昌史さんは砂漠で満天の星空を見上げながら、帰国後は麻人さんと一緒に穴窯と向き合うことを心に決めます。

後継者を育成し、砥部焼の魅力を世界に発信

ろくろを回して削土

二人の手掛ける作品は、麻人さんが鮮やかな色と曲線が織りなすエキゾチックな新感覚系。昌史さんは素朴な色と形が特徴の、侘びさびに満ちたオーソドックス・タイプです。デザインは対照的ながら、エジプトでの経験で培ったスケール感と穴窯ならではの温かみがあふれます。

土を成形する際も手の微妙な感覚が大切に

理想の砥部焼を目指して日々の制作に余念のない二人ですが、実は昌史さんは現在、教員免許の取得にも奮闘中。地元の学校で陶芸を教えるためです。

「派遣国で子どもたちを教えた感動が忘れられません。砥部焼の後継者を育てるのはもちろん、生徒たちには海外に興味を持ってもらえるように自身の経験を伝えたい」。

兄の麻人さんも今後の目標について、「砥部焼や愛媛県の魅力をPRできるような作品展を海外で開催したい」とキッパリ。「まずは弟とエジプトで二人展ですね」と口にすると、昌史さんも笑みを浮かべながらしっかりと頷きました。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

少しでも興味があれば、ぜひチャレンジを!

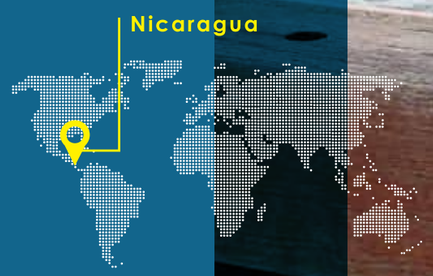
「協力隊に参加すると、視野や考え方の幅が必ず広がります。また現地での経験が知らず知らずのうちに役立つことも。それは何年経っても実感できます」（池田麻人さん）　「協力隊に参加することで色んな国の、色んな職種の人と知り合いになれます。大きな刺激を受け、世界との繋がりを肌で感じられますよ」（池田昌史さん）

香川県小豆島町

「子どもたちの元気な声があふれる島に」赴任地で気づいた故郷への大切な想い

小豆島町役場 職員

現地での指導の様子



藤井愛子（ふじい あいこ）さん

赴任地

ニカラグア

赴任地での職種（活動分野）

青少年活動

主な活動内容

青少年に対してレクリエーションを通した性教育の指導など

まさか!?の事態が教えてくれたこと

「仕事で会う約束をしていても、遅れてやって来るのは日常茶飯事。姿を現さないケースもあったほどです。赴任してしばらくは面食らいっぱなしでしたが…」。

培ったスキルを途上国で存分に活かそうと、張り切って協力隊に参加した藤井さん。けれども当初は、日本との感覚の違いや、仕事がままならない状況にストレスを感じる毎日。そんな中で次第に胸を打ち始めたのは、現地の人たちの強い愛国心でした。

児童養護施設での社会人経験を経て、藤井さんがニカラグアに赴任したのは2005年。学生時代に途上国の子どもたちと関わるワークキャンプを経験して以来、ずっと海外での長期ボランティアを意識していたそうです。3人の仲間と赴任した現地のグラナダ県では保健センターに配属になり、レクリエーションを通した性教育を青少年に指導することに。またJICAの専門家チームと連携して行リーダーを育てるための性教育プログラムも担当になります。ニカラグアでは若年層の妊娠が非常に多く、深刻な社会問題にまで発展していました。ところが、頼みの専門家チームの到着が大幅に遅れるまさかの事態へ。保健の知識のない藤井さんたちにとって、苦難の始まりでした。

レクリエーションを交えることで、子どもたちの興味や集中力を高めます

できることから柔軟に対応

「現地の保健センターは日本とは違い、診療や看護機能があります。専門的な資格のない素人同然の自分たちの立場は、職場からまったく理解されませんでした」。

4人はまず保健の勉強を徹底的に行い、指導するためのマニュアルをイチから作成。また、性教育というジャンルにとらわれることなく、柔軟なサポートにも励みます。現地の小学校や団体を精力的に訪れ、ニーズに合わせて日本の文化などを紹介。時間の感覚や文化にも慣れながら徐々に活動の輪を広げ、職場からの信頼も集めていきました。専門家チームが到着するまでの約1年間を工夫しながら乗り切ったのです。

「飛び込むような活動を通していつも感じたのは現地の人たちの熱気。ニカラグアは貧しい国ですが、祖国を想う気持ちがとても強い。そして、次世代を支えるたくさんの子どもたちもエネルギッシュでした。専門家チームがいなかったからこそ、よりダイレクトに胸に響いたエピソードかも知れません」。

少子高齢化が進む故郷・小豆島を真剣に考える大きなきっかけにも繋がったと話します。

指導した子どもたちと一緒に

HPや国際イベントを通して地域を活性化

現地での任務を終えた後、藤井さんは郷里に戻り、地域活性化を目指して小豆島町役場に就職。2011年からは女性目線で島の魅力を伝える「小豆島ガールプロジェクト」を島の女性たちと立ち上げ、ホームページ（http://shimagirl.jp/）を中心に情報を発信しています。内容は島での日常や季節の移り変わり、観光スポットの紹介はもちろん、出会いや人といったハートフルな話題も網羅。取材対象者や紹介者の楽しさも伝わり、見ると元気をもらえるページです。「瀬戸内国際芸術祭 2016」の期間中は、香川県瀬戸内国際芸術祭推進課へ出向し、イベントの運営をサポート。それまでとはジャンルの違う地域活性化に向けた取り組みに、「赴任時代に養った対応力が役に立った」と笑います。

「出身者が島に誇りを持ち続けられるように。そして、子どもたちの元気な声が島にあふれるように」。

藤井さんの故郷への恩返しは続きます。

ニカラグアでは日本人というだけで信用してもらえることも多かったとか。好イメージを築いたこれまでの日本人へ、藤井さんは感謝を口にします。

藤井さんへ 上司からのエール!!

香川県瀬戸内国際芸術祭推進課 副主幹 仲川暁さん

「藤井さんは地域再生の取り組みに人一倍、力を注いでいる方です。活動には困難も伴いますが、協力隊で養ったスキルをしっかりと発揮して確実に目標をクリアーしています。瀬戸内国際芸術祭でもその情熱で大勢を巻き込み、イベントを成功へと導きました。周りは藤井さんへの協力を惜しまないファンばかりです。今後も活躍を期待しています」

香川県高松市

家庭的な時間を大切にしながら故郷で地域も潤う国際協力を

ゲストハウス若葉屋 宿主

若宮武（わかみや たけし）さん

赴任地

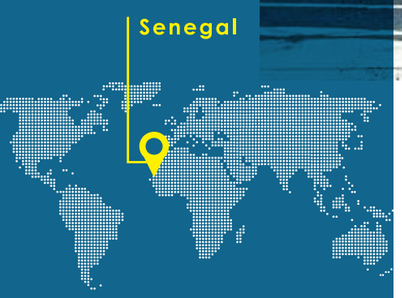
セネガル

赴任地での職種（活動分野）

村落開発普及員

主な活動内容

養蜂箱の作り方を農家に指導する研修をコーディネート



現地の子どもたちと

養蜂技術を村に根付かせるために

国際協力業界で活躍できる社会人を夢見て、学生時代から専門的な経験と勉強を積んできた若宮武さん。開発コンサルタント企業への就職を目指し、スキルアップのために参加した協力隊で最も深く学んだことは、意外にも故郷との関わりでした。

若宮さんは3年間の社会人経験の後、2009年から2011年までセネガルで活動。話せる人が少ないフランス語が公用語だったことや、さまざまな国の開発援助が行われていた背景など、後の就職に繋がりそうな好材料が揃っていた点も赴任国を選んだ理由でした。

現地では村落開発普及員として主に養蜂に従事。セネガルでは以前から蜂蜜の食文化がありましたが、効率の良い養蜂は行われず、自然の巣から採蜜するのみでした。若宮さんは安定して生産できるようにするために、養蜂箱の普及を目指します。ポイントは村人が積極的、継続的に取り組むように普及の方法を工夫することでした。

「単に完成品を渡しても、村人は養蜂箱に興味や愛着を抱きません。仕組みへの理解も不十分になるため、メンテナンスにも困ります。だから自分たちで作ってもらう必要がありました」。若宮さんは養蜂箱を作るための研修を精力的にコーディネート。参加者により分かりやすい説明を行うために、指導は自身ではなく、探し訪ねたセネガルの養蜂農家に担当してもらったといいます。努力は実を結び、研修は毎回大盛況。技術を学んだ参加者が知り合いに教え始めるケースも生まれるなど、各地に養蜂ブームが訪れました。

「最終的には10ヶ村くらいまで広がりました。廃材や壊れた冷蔵庫を使って養蜂箱にする思いもよらなかった人も現れ、僕にアドバイスを求めてくるんです。嬉しかったですね。最近、現地の知り合いから未だ養蜂が盛んなことを聞き、当時の充実感が甦りました」。

養蜂箱を作る様子

若宮さんと蜂蜜を手にする村の人たち

ローカルならではの強さとメリット

活動を通し、若宮さんの心境にも徐々に変化が現れます。「海外から足を運んでどんなに頑張っても、ローカル情報や共通感覚を持ち合わせている地元の人にはかなわない」。予想以上の養蜂の熱気と、それが村人によって作られている状況を肌で感じ、国際協力業界ではなく、地元での生活に意識が傾くのです。

「〝地域開発のために〟と意気込んでいるわけでもない村人たちの、普段の生活や仕事こそが、結果的には地域開発に繋がっている。その現実を突きつけられました」。日本人の父親よりもセネガル人の父親の方が、自分の子どものことをよく知っているというエピソードにもしばしば出会い、ショックを感じた若宮さん。赴任後は故郷の高松に戻ることを心に決めます。

赴任時代は翻訳を通して国際文通の橋渡しも

問い合わせを受け、宿泊の予約状況を確認

訪れる旅行客に地域の魅力をPR

現在はセネガル時代に知り合った同期隊員の奥さんとともに、宿主として「ゲストハウス若葉屋」を切り盛り。海外での宿泊経験を活かし、利用者の視点からサービスをアプローチします。子宝にも恵まれ、セネガルの一般的な農家と同じ自宅型の職場環境を確立。家族との触れ合いも大切にする毎日です。瀬戸内国際芸術祭が行われた2016年には、フランス人をはじめ大勢の外国人観光客が若葉屋を利用。地元に住んでいるからこそ知っているローカル情報が、サービスの大きな要素になったと話します。

「フランス語を学んだ甲斐もありました。実はセネガルで公用語を話す人はほとんどいませんでしたけど」。

故郷から世界へ。笑みを浮かべる若宮さんの国際協力活動は、まだ始まったばかりです。

若宮さんへ 仲間からのエール!!

ゲストハウス ちょっとこま オーナー 伊藤裕さん

「若宮さんは周りの人によく気を配る、面倒見のいい方です。そのための自身の手間を厭いません。ゲストハウスのオーナーが集まる際もまとめ役を買って出てくれ、細やかにフォローしてくれます。協力隊の活動で培った対応力を感じますね。今後も同じ志を持つ仲間として、地元の観光業を豊かにするために頑張りましょう。頼りにしています」

徳島県神山町

神山町地域おこし協力隊

里山を揺さぶって未来を豊かに 持続可能な魅力ある町を協力隊OGが作る

滝下智佳（たきした ちか）さん（右）

赴任地

ボリビア

赴任地での職種（活動分野）

青少年活動

主な活動内容

教材を活用した学びの提案

川野歩美（かわの あゆみ）さん（左）

赴任地

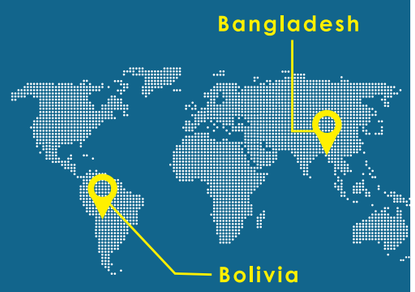
バングラデシュ

赴任地での職種（活動分野）

コミュニティ開発

主な活動内容

住民グループでの生活改善支援（有機栽培の普及）



話題の里山に、もっともっと活気を

滝下さんと川野さんが住む神山は、徳島の山あいの小さな町。過疎と高齢化の課題を抱えていますが、さまざまな革新的な取り組みを行い、都会のIT企業のサテライトオフィスの開設が相次ぎ、移住者も増加している話題の町となっています。

町ではさらなる活性化を目指し、5年前から毎年「地域おこし協力隊」を募集。2人も応募して移住し、地域おこし協力隊の現役メンバーやOB・OGで運営するNPO法人里山みらいに所属しています。「古くて新しいみんなの里山をつくろう!」をテーマに、移住者の視点を活かして里山と都会をつなぎ、持続可能な里山文化を創造して未来に残すのが目的です。

協力隊での経験が、里山に向かわせた

滝下さんは徳島市内の出身。関東の大学に進学し、数年間教育関係の企業で働いた後に協力隊でボリビアに赴任しました。担当したのは教材を使った楽しい学びの提案。南米には「アミーゴ文化」といわれる、人間関係を尊び相互扶助を当たり前に行う習慣があり、友達になった現地の大学生たちがたびたび活動を手伝ってくれました。「与えるものより与えられるものが多かった」と、滝下さんは当時を振り返ります。帰国後も東京で働きましたが、「豊かな自然や人との繋がりの中で子どもを育てられたら」と、家族で神山に。東京出身のご主人も、里山の暮らしを楽しんでいます。

赴任先での川野さん。村の人々の温かさに何度も助けられました

リサイクル工作を教える滝下さん。子どもたちの眼差しは真剣そのも

一方の川野さんは千葉県出身。大学で国際協力を学び、一度は自分の目で途上国の暮らしを見たいと思うようになりました。協力隊ではバングラデシュの少数民族の住む地域に赴き、土地が無くても野菜を育てられるよう、袋の中で有機野菜を育てるマイクロガーデニングを普及。政情が不安定になり自宅待機していた時期には、「寂しくないように」と現地スタッフが、おいしいカレーをごちそうしてくれました。我が道を行くタイプだった川野さんも、協力隊で村のお母ちゃんたちとの温かい交流を経験し、「帰国後も、どこかの田舎町でみんなと協力して地域のために何かを行いたい」と思うように。そしてみつけたのが神山だったのです。

これからも神山で、町と自分を元気にしていく

現在2人は、特産のすだちと梅を通して神山を活性化しています。ふるさと納税制度を活用し、深く町と関わってもらう試みに「神山すだち住民課」があります。一定額以上納税すると「すだち住民証」が交付され、「おすそ分け便」として年3回野菜や米が届きます。さらに神山の魅力を伝える新聞も同封されます。東京と神山の飲食店が創作すだち料理を提供するイベント「すだち遍路」も開催。都会でのすだち消費促進と、傷などがあるB級品活用にも繋げました。また、神山の梅干しを「神山ルビィ」と称し、梅農家を紹介し、梅の花が咲く町を散策するイベントも開催。さまざまな人が漬けた梅干しの食べ比べができるギフト商品も売り出しています。

家族で移住した滝下さん。町で生まれた赤ちゃんは、みんなのアイドル

滝下さんと川野さんは、NPOの仲間たちとともにプロジェクトを企画。地元の農家さんに企画趣旨を説明したり、東京の飲食店と折衝を行ったり、パンフレット等の媒体も制作しています。

「神山が昔から持っていた魅力を編み直すのが、楽しくて仕方がない」という2人。神山で2人目のお子さんを授かった滝下さんは、「親子が集えるような場作りに関わりたい」と、川野さんは「世界中から人が集まれる農家民宿を作りたい」と、町も自分ももっと元気にする夢を語ってくれました。

「里山みらい新聞」の編集を担当。自分が食べる分のお米を作るのも目標

途上国で、人と交流する価値に気づけます

「なかなか思い切りがつかず、数年間応募を躊躇。現地で困った時には、現地の人や仲間の隊員が助けてくれました。帰国後も協力隊経験者の繋がりは深く、心強いですよ」（滝下智佳さん）「困難な時も悲観せず、そこにあるものでどうにか楽しくやって行く力を得ることができました。人と助け合う喜びを知ったのも大きな収穫です」（川野歩美さん）

徳島県吉野川市

国際支援を続けたい医療人が集う 地域循環型社会を実践する診療所

特定非営利活動法人 TICO

福士庸二（ふくし ようじ）さん（左）

赴任地
マラウイ

赴任地での職種（活動分野）
自動車整備

主な活動内容
農業指導員が使用するオートバイの整備

吉田修（よしだ おさむ）さん（中）

赴任地
マラウイ

赴任地での職種（活動分野）
医師

主な活動内容
外科医としての診療

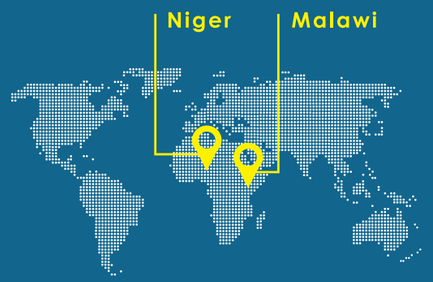
新野和枝（しんの かずえ）さん（右）

赴任地
ニジェール

赴任地での職種（活動分野）
栄養士

主な活動内容
公共診療所で乳幼児検診、地域巡回検診

マラウイでの福士さん。「貢献できた」と納得ができず、次の支援に赴きました



支援の途絶えた悔しさが、今に繋がる

春には美しく花が咲く桜の木を、ロッジのような木造の建物で取り囲むのが、医療法人さくら診療所の施設群です。協力隊としてマラウイに出向した吉田さんが、「地域の課題を医療面から解決し、医療人が生涯国際協力に関われる拠点にもなるように」と1999年に設立しました。

親しみやすい雰囲気でありながら最新の検査機器も備えた診療所は、24時間患者を受け入れており、入院施設も完備。リハビリや介護施設、病児保育園なども一つずつ増やしました。ここは、NPO法人TICOの拠点にもなっていて、高い志しを持つ優秀な医療人が全国から集まり、災害や紛争が起こるとワークシェアをしながら世界に飛び出します。協力隊のOB・OGスタッフはのべ10人。ジャパンハートや国境なき医師団で活動した医師もいます。

吉田さんはマラウイで、900も病床がある病院のたった一人の外科医となり、多忙な2年間を送りました。志望者がおらず、残念ながら後任のいないまま帰国。支援が途切れた無念さを抱えながら、国際医療ボランティアAMDAを創設した菅波茂医師の下で働きました。そこで行われていた、地域医療と国際貢献を両立する活動をお手本に、故郷に立ち上げたのが現在のさくら診療所です。

無から有を作る支援の実務家が参加

事務局長として、吉田さんの望みを実現するのが福士さん。マラウイやジンバブエ、ベトナムなどでの協力隊をはじめとする活動が約8年にも及ぶ、海外支援のベテランです。「数々の修羅場を乗り越え、ゼロから何かを立ち上げる実践力と楽天的な性格が思いきり鍛えられました」と笑います。診療所を始めたばかりの吉田さんに「一緒にやらない?」と誘われ、すぐさまYESと返事。福士さんも、経済的にも精神的にも安定して国際支援を続けられる場の必要性を強く感じていたのです。

二人三脚で十数年をかけ診療所にさまざまな機能を持たせて来ましたが、充実するほどに「豊かな医療は、地域の総合力があってこそ」と感じ、手始めとして農業の六次産業化を行い安心安全な食を提供する会社として立ち上げたのが「Plan B」。入院患者の食事には、以前から自分たちの畑で採れた無農薬野菜を使っていましたが、より多くの野菜を作って販売し、料理してレストランでも提供します。

その一環として「さくらcafe」を任されたのが、診療所で働いていた管理栄養士の新野さんです。TICOのメンバーとしてザンビアに行き、協力隊ではニジェールに赴任した経験があり、「アフリカの人々が祖国や郷土を思う気持ちに触発され、地元愛がより強まった」と言います。カフェでは、食で地域支援を展開する「コミュニティレストラン」という理念の下、健康情報の提供や野菜の販売も行い、健康の基本である食習慣の大切さを気軽に伝えています。

検診をサポートする新野さん

医療・国際支援・食に加え、エネルギーも

ここまでで充分に、オリジルでアクティブな組織ですが、視線はさらに未来に。「目の前の患者さんを診るだけでなく、次世代・次々世代に健やかな社会を残したい」と、地元の山の木から作った薪やペレットを使用し、Co2負荷の少ない地域循環型のエネルギーづくりにも取り組んでいます。また温泉事業にも携わり、障がい者や高齢者、原発事故の移住者たちの雇用も生み出しました。

地域も世界も同時に元気にするホットな活動は、徳島の小さな町で日々更新されています。

吉田さんは、患者の緊張を和らげるため診察室で白衣を着ないことも

「循環型地域モデルとして何ができるのか、日々模索中」と福士さん

途上国で、人生に立ち向かう力をもらえます

「途上国でも同じ人間が頑張って暮らしています。その様に触れ、自分が根本から変われます」（吉田修さん）「見えなかったものが見えるようになります。会えないはずの人に会えます。私は緒方貞子さんに会えました」（福士庸二さん）「海外では思わぬ特技が役立ちます。自分には何もないと思わず、自信を持って挑戦して」（新野和枝さん）

高知県黒潮町

赴任地モンゴルからスタートした世界の子どもを繋ぐTシャツアート

特定非営利活動法人 NPO砂浜美術館
事務局スタッフ

西村優美（にしむら ゆみ）さん

赴任地

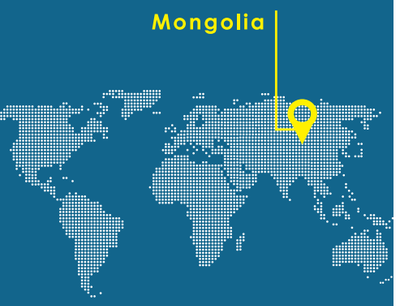
モンゴル

赴任地での職種（活動分野）

小学校教諭

主な活動内容

図画工作を中心に日本の教育法を伝授



自分の海外経験が、誰かの役に立つ方がいい

子どもの頃から海外と外国語への興味が強く、高校時代はオーストラリアにホームステイし、大学時代にも同じ地を1ヶ月ひとり旅したという西村さん。英語の先生を目指していましたが、教育関係のアルバイトで子どもたちと触れるうち小学校の先生に進路を変更。それでも、いつか世界に出たいという想いは強く、「同じ海外なら、現地の人の役に立つ青年海外協力隊がいい」と考えていました。そのためにも社会で経験を積もうと小学校の教員を数年務めた後、協力隊に参加。モンゴルのダルハンに赴きます。

モンゴルでの図画工作の授業風景

お手本をきちんと真似る図画工作に自由な創作心を

社会主義だったモンゴルは、体制変化に伴う教育改革を日本をモデルに行ったと聞いていました。しかし図画工作の授業を見学すると、先生のお手本をいかに上手く真似るかで評価が決まっており、日本とはずいぶん違います。「子どもたちの個性を存分に発揮させ、全員にハナマルをあげたい」というのが西村さんの心の声。けれど現地のやり方とかけ離れると児童も教師も混乱します。そこで創作心を引き出すワンアイデアを加えた授業を行うと、大成功。異国から来た先生の教えに子どもたちは瞳を輝かせ、全身で喜びを表しながら工作に熱中してくれました。

赴任2年目には、西村さんのアイデアを盛り込んだ指導書を作成。20人ほどいた赴任校の先生一人ひとりと事前に打ち合わせをした後、授業を行ってもらいました。配属校の先生はそれを高く評価して他校の先生にも推奨。西村さんの指導書はダルハンで広がっていきました。

美術館の活動で、モンゴルで得た変わらないことの豊かさも伝えます

道の駅兼事務所にある漂流物を使った展示は、西村さんの手によるもの

Tシャツアート展での1コマ。大きな絵本に、子どもたちは夢中

紙の〝Tシャツアート展〟のための作品づくり。子どもたちの笑顔が原動力に

モンゴルの草原にも似た砂浜から、世界へ

「モンゴルでは、一歩都市を出ると見渡す限りの草原があり、その果てになだらかな丘と地平線が広がります。ここには海と水平線。同じような空気が漂っています」。

現在働いているのは、高知県幡多郡黒潮町にあるNPO砂浜美術館。太平洋沿いに4kmも続く砂浜を美術館、松原や貝殻、漂流物も作品と捉え、発想の転換で創造力が生まれることや、地球にとって本当に大切なモノは何かという問いを発信しています。町に美術館がないことを逆手に取り、自慢の砂浜で地域も活性化する試みは、1989年に始まりました。公募した絵をTシャツにプリントし、洗濯物を干すように砂浜に展示する基幹イベント「Tシャツアート展」も同年にスタート。その後も毎年開催され、世界へもその風景が広がっています。

西村さんは香川県の小学校で教鞭をとっていた時に砂浜美術館を訪れ、ここのファンになりました。10日間住み込みでボランティアとして働いたこともあり、「Tシャツがたなびく風景はきっと世界の他の景色にも似合う」と感じたそうです。そして、赴任が決まった時に湧き起こった「モンゴルでTシャツをはためかせたい」という想いを実現させるため、現地で活動の合間に奔走。海外初となるTシャツアート展「草原美術館」を実現させました。

「この試みを一過性にせず、子どもたちが世界と繋がる国際教育の一環として黒潮町に定着させる」。そんな地域内外への新展開の担い手として呼ばれたのが西村さん。キビキビと働きながら、「教員も協力隊も、自分の経験のすべてを活かせる仕事に出会えて幸せです」と語ります。

西村さんと、砂浜美術館のメッセージをのせた「Tシャツアート展」は、今までに国内外20ヶ所以上で開催されています。

西村さんへ
仲間からのエール!!

NPO砂浜美術館 事務局スタッフ 岡添久代さん

「企画力、発想力、デザイン力があり、文章も書けるデキル人。行動力もあっていつも笑顔。楽しくないといい仕事ができないとよく言っています。町内や取引先などを惹きつけ、周りを盛り上げるエネルギーがあり、どの国や地域に行っても、そこの文化を面白がり、その土地や人に溶け込むのも特技です。今のまま変わらないでいてください!」

高知県四万十町

未来の地球市民を育てる教育者になろう 協力隊員としての2年が、人生の夢をくれた

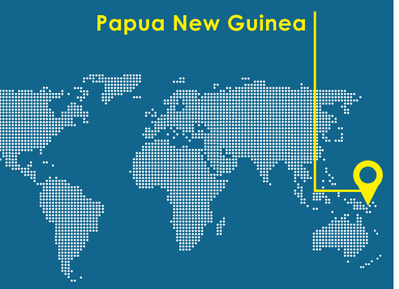
四万十町立
窪川小学校校長

坂山英治（さかやま えいじ）さん

赴任地
パプアニューギニア

赴任地での職種（活動分野）
船舶機関

主な活動内容
魚の運搬のための船舶管理



人生に迷った時、協力隊の姿が心に浮かんだ

子どもの頃から外国航路の船乗りになりたかった坂山さん。愛媛の国立弓削商船高等専門学校に進学するも、卒業後は海とは無縁の販売業の会社に就職しました。安定したサラリーマン生活でしたが、次第に人生が夢の航路を逸れた焦りを感じ始めます。時が経つにつれて商船学校時代にトンガで出会った協力隊員のいきいきと輝く姿が頭から離れなくなり、自らもチャレンジを決意。見事合格し、パプアニューギニアのブーゲンビル島の水産局に配属され、船舶管理の任に就くことになりました。

パプアニューギニアにて。
中央が坂山さん

文化ギャップの逆境を人との交流で乗り切る

ブーゲンビル島は首都から離れた小さな島の一つ。坂山さんは、周辺海域で豊富にとれる魚を集めて州都アラワなど街に運んで販売し、地元に現金収入をもたらそう、というプロジェクトの一員になりました。しかし現地の人たちは、「海には魚が泳ぎ、ジャングルにはココナツが実る。働かなくても食べる事には困らないのに、なぜ現金が必要なんだ?」との考えもあり、なかなか趣旨を理解してもらえません。そのうえ船は故障が多く、補修用に頼んだ部品は一向に届きませんでした。

坂山さんは困難な状況に戸惑いながらも、一緒に食事をして酒を飲み、互いの国や家族について話をするなど、現地の人々との交流を深め相手を尊重しながら、問題解決を図りました。その経験で掴み取ったのは「日本人も途上国の人も、皆同じである」という国際理解の感覚。それを得て、世界がより明るく豊かなものに見え始め、さらには「この感覚を持つ日本人を一人でも多く育てたい」と、新たな夢が生まれました。

ブーゲンビル島に墜落した
山本五十六の搭乗機とともに

校長室には大きな地球儀。
これを使って子どもたちに
世界の話をします

現地の仕事仲間の子どもと。
赤ちゃんは、坂山さんに敬意を表し
「エイジ」と名付けられました

地域を元気にすることは、国際貢献の第一歩

帰国後、通信教育で2年をかけて教員免許を取得し、小学校の先生になって約30年。現在は、地元の四万十町立窪川小学校の校長先生を務めています。

「教育の目標としてきたのは、国際理解と地域貢献。私の住む四万十町でも、コンビニで売っているお弁当の食材はほとんどが外国産で、確実に国際社会と繋がっています。その繋がりの理解を深める必要性も楽しさも、子どもたちや地域の方々に知らせたい。また、途上国支援で大切なのは、その地域の問題を解決し、魅力を引き出す視点や行動力。高知の小さな町を元気にする試みは海外でも応用でき、支援力をつける第一歩になります」と坂山さん。

以前赴任していた学校では、児童も地域の人々も参加する地区民運動会が途絶えていたのを、海外からの留学生も招く国際交流運動会として復活させました。また、国際理解を推進する教員のネットワークを作り、次世代の指導者を育成するために「四国国際理解教育研究会」を設立。協力隊の経験で得た夢を、一つずつ形にしてきました。今後は、海外で日本人学校の校長を務める予定です。

「ヨーロッパ赴任になる予定で、今までとは違う世界の一面を経験できると思います。それを活かし、高知の小さな町をもっと元気にしたい」と坂山さん。地球市民を育てる夢の航路はまだまだ途中。未来に向かって進みます。

「世界も高知の田舎も元気にしよう」が
坂山校長のモットーです

坂山さんへ 仲間からのエール!!

四万十町立窪川小学校 総括主任 高橋千恵さん

「世界を目にしてきた坂山先生は、みんなの憧れの的。赴任時の文化ギャップの話を聞き、「フェアトレード」という言葉も先生に教えてもらいました。器が大きく、「みんなで楽しく生きようよ」という明るさの溢れるエネルギーで、周りを元気にしてくれます。校長先生と総括主任は、学校での夫婦のようなもの。坂山校長は、職場の最高の夫です」